

高等学校グランドデザイン会議第2回第1専門委員会概要

日時：平成18年8月28日(月)

10:30～12:30

場所：県庁北棟 2階A会議室

<出席者>

豊川委員長 前田副委員長 荒瀬委員 石山委員 佐井委員 櫻田委員 佐々木委員
古舘委員 牧野委員

開会

司会

それでは、定刻になりましたので、ただ今から「高等学校グランドデザイン会議 第2回 第1専門委員会」を開会いたします。

議事に先立ちまして、事務局から委員の交代等について御報告させていただきます。

事務局

おはようございます。先般、委員として委嘱いたしました今泉はる様につきましては、一身上の都合により委員を辞職する事となりました。後任につきましては、やねに商事 常務取締役の古舘順子様をお願いする事となりましたので御報告させていただきます。よろしく申し上げます。

古舘委員

よろしく申し上げます。

事務局

第1回目の第1専門委員会を所用により御欠席されました委員につきまして、改めて御紹介させていただきます。むつ市教育委員会教育長 牧野正蔵様でございます。

牧野委員

おはようございます。牧野でございます。第1回目はやむを得なく欠席させていただきました。まずは勉強させていただきます。

事務局

以上でございます。どうぞよろしくお願いたします。

議事録確認

司会

それでは、これより議事に入らせていただきます。ここからの進行は豊川委員長にお願いします。

豊川委員長

それでは、議事進行を務めさせていただきます。次第に従いまして、議事録の確認を事務局からお願いします。

【事務局が、配布資料に基づき説明。】

報告事項

豊川委員長

それでは、報告事項について事務局から説明してください。

【事務局が、配付資料に基づき説明。】

協議事項

豊川委員長

それでは協議に入りたいと思います。

皆さんのお手元にありますように、規模・配置という事で「1学年あたりの適正な学級数」、「普通科と職業学科と総合学科の在り方」について検討する事となっています。事前に皆さんから詳しく御報告いただいたものが、皆さんの手元にあると思いますので、後で個別に見て行きたいと思います。あくまでも、今日はまず方向性について話し合うことになるだろうと思います。

まず最初に、皆さんの意見を簡単に集約すると、適正な規模・配置の在り方という事があります。進学校に関しては、大体1学年6学級以上という意見が多かったのではないのでしょうか。また、市部の進学校では8学級必要ではないかという意見もありました。それから、郡部の学校では3学級もやむを得ないだろうという意見もありましたが、4学級以上は必要という意見が多かったです。それから、職業高校については、普通高校ほど明確な意見はなかったのですが、やはり4学級以上は必要という意見が多かったと思います。皆さん専門家が多いので実情を知っている訳ですから、少人数では学校運営がなかなか難しい面がある、しかし、例外もやむを得ないかなという事だと思えます。

私が気になったのは、工業高校は都市部にあるが、その他の職業高校はないという事です。3市に農業高校はありません。その他に、どの地域に学校を配するかについては、特に御意見はなかったようです。

普通科と職業学科と総合学科の在り方や割合については、色々な御意見がありました。地域の雇用状況等から、地域には地域の特色のある職業高校も必要だろうという御意見だと思います。また、同一学科で1学年2学級はいらないだろうという意見もありました。総合学科については、進学校を目指す方向、職業学科の総合学科への編入、総合学科のない地域には設置するべき等の意見があり、総合学科を活かす方向が示されています。一方では、職業高校については安易に統廃合するべきではないという意見もありました。

募集割合については、全国比率で良いのではないかという御意見があります。御存知のように、データーにもありましたが、本県では普通高校比が低くなっています。単純に全国比率に青森県の学校数をかけてみると、普通高校はプラス27校、職業高校はマイナス20校、総合高校はマイナス7校としなければなりません。これくらい大きな動きが求められているのかもしれませんが、偏っていると言ってしまうのが分かりませんが、いずれにせよの所では、普通科を増やす方向の意見が大部分だと思います。

今回の専門委員会では、意見を集約したり結論を出すのではなくて、次の委員会に向けて方向性について意見交換ができればと思っています。では、項目毎に進めてお互いに認識し合って行きたいと思います。

まず最初に、1学年あたりの適正な学級数、普通科、職業学科、総合学科のそれぞれ望ましい学級数について御意見をいただきたいと思います。

A 委員

全体として、今高校に求められているのは、高校からの就職は厳しい状況なので大学進学だと考えます。事前に配布された資料の中に教員配置に関する資料がありますが、例えば理科の教員を考えますと、この表の中でも各科目（生物、地学、化学、物理）の教員を揃えるには最低4学級規模が必要で、このあたりを基準に、更に進学指導を充実したものにしたいと考えると、6～8学級規模が望ましいという事になると思います。

豊川委員長

私も資料を見たのですが、4学級や5学級ですと生物の教師は1人だけという感じになりますよね。1人の先生方で間に合っているのか、という気がします。

A 委員

理科の教員は4科目全て担当することが出来る事となっていますが、実際は難しいと思います。やはり、大学受験指導まで対応するとすると、1人で2科目担当までではないでしょうか。

豊川委員長

私の頃は、1人1科目しか担当していなかったですけどね。

A委員

私達が高校生の時代は、生徒が理科の全ての科目を履修するカリキュラムでした。今は4科目の中から2～3科目を選択履修させているのです。

豊川委員長

いわゆる進学校と、郡部・市部の高校の区別はあるのでしょうか。

A委員

三沢高校は青森高校、弘前高校、八戸高校とは別の形の、地域の将来を担う人材を育てて行こうという学校です。学級規模が減って行くと元気がなくなって行くという面があります。7学級くらいの規模は守って行きたいと思います。別な面から言うと、国公立大学ばかりが目標ではありませんが、今は50人程度の合格者ですが、やり方次第では80人とか100人まで伸ばせると思います。それが規模が小さくなり先生方を確保できなくなると、進学指導に支障が出てくると思います。

B委員

都市部の6～8学級の学校は、やり方や工夫次第でどうにかなると思いますが、郡部の小さい学校で、多様な生徒の志望に対応するため選択制や学校設定科目を色々抱えている学校に対して、現在は県費の職員を非常勤なり外部講師でお願いしていますが、そこで町村の小学校や中学校の先生を外部講師としてお願いするという方法は取れるのでしょうか。任免権者が違うので難しいとは思いますが、そうすると1つの突破口が見えるのかなと思います。その辺どういう考え方をすれば良いのでしょうか。

事務局

現在は任免権者、採用区分、免許も違いますので、そういう方法は取っていません。ただ、これからの検討課題の1つとして、特に高校と中学校の関係は検討したいと思っておりますが、現在の所はそういうシステムはありません。

B委員

小・中学校の先生方は、結構地域に根差した得意分野を持っているようですので、これを高校で活かせれば、また色々な選択肢になるので臨時免許でもいいから何か方法はあるのかなと思いました。現在は考えないという事ですね。

事務局

中高一貫教育の中では、6年間を見通した教育課程を設定するという事で、中高を相互に教えて行くシステムは行われています。

C 委員

先程の話の中で、各地域の進学校と呼ばれている学校に近隣の町村から生徒が通学しているという現実がありますので、その学校を中心とした学級編制を考え、その他の地域の学校は4学級で良いのかなというのが私の意見です。4学級規模があれば、色々なカリキュラムの中で色々な設定ができるはずです。4学級あれば、生徒の進学ニーズに合わせて先生方が努力して履修科目を設定し、進学の拠点校でない学校へ行ったとしても進学希望がかなえられるようにすれば良いのではないのでしょうか。

また、同じ青森市内でも、全部が進学を目指す形ではないと思います。そこをどう考えるかという発想から、適的な規模は4～7学級かなという気持ちを持っています。

D 委員

質問という形になるのですが、この会議をどういう視点で捉えたらいいかなと思っています。生徒の教育機会均等のための環境整備という観点も当然ですが、先程説明がありましたように平成30年度までには高校入学予定者が2,700人減るので68学級くらい学級を減らさなくてははいけません。生徒の減少が始まって20年近くなる訳ですから。しかし、単なる数合わせと同時に、機会均等という形をしながらも青森県の教育レベルや水準を維持するという視点を入れて行かなくてははいけません。

また、市部と町村部とありますが、市部が何を指すのかも分かりません。町村合併もありましたので表現の仕方を工夫しなければいけません。今までは4～8学級あたりが良いと思っていましたが、将来を考える中でそのままいいのかなと思います。もっと子ども達が偏ってしまう傾向が出るのではと考えます。と言いますのは、前のデータで見ますと平成20年度は66校あるが、その中で3学級以下は26校で39%となっています。これを4～8学級という形だけで括れるのでしょうか。やはり市部中心になるので4～8学級がベターとありますが、これは今までの事であって、今後望ましいのは240人以上つまり1学年2学級だと思います。こういう事も容認して行かなければいけないでしょう。今の所、やはり教育の機会均等、教育のレベルとのバランスを旨く考えなくてははいけません。

E 委員

統廃合も必要かもしれませんが、郡部の方は校舎化で学級数を減らしています。八戸市内を見ても将来的に子ども達が減って行くのは目に見えていますから、市内の学校も学級を減らすという前提で考えて良いのか、今の形で存続した形で考えなければいけないのか。その部分が考えるスタートラインとして大きな前提になります。と言います

のは、青森高校、弘前高校、八戸高校は6～7学級を維持し、地域を担う人材を育てて行く大きな役目があります。そうすると、生徒数は減っているのに1番手の学校の学級数はそのままになり、二番手以下は自動的に3～4学級へと減って行きます。市内にそういう普通学校がある事で、効率的な教育ができるのかという疑問を感じます。市部の普通高校の数は今のままを維持して行くのかをお聞きしたいです。

郡部の学校もやはり、子ども達が減って行くのは間違いなく、そして校舎化で1学級になってしまいます。率直に言って、これはあまり良い形ではないと思います。何らかの手段を使って統合し、最低限1学年あたり2学級規模として学校運営できるような方法を探らなくては行かなくては行けないと思います。

豊川委員長

質問ではなくて、我々でこれで決めて行くんだという事で良いのではないのでしょうか。今の意見を上手くまとめてみれば良いと思います。

F 委員

十和田の三本木高校で中高一貫教育が次年度から実施されるのですが、中学校は1学年あたり2学級しかないのので部活動等がどうなるのだろうと親御さん達がすごく心配している所が多いです。十和田西高校も設立当時は特徴がある良い教育ができて、いい雰囲気だったのですが、最近は一般的に聞いてあまりぱっとしないようです。八甲田高校も本当は行きたくないけれど、偏差値でしょうがないから十和田から行くと聞きますが、そういうのはどうなのかなと思います。先程おっしゃったように、あまり学級数を減らすと、良い先生が得意分野以外にも色々な科目を掛け持ちしなくてはならなくなるので、ある程度の学級数は維持して、スクールバス等の措置をして小さな学校は統廃合して行く方が良いのではないのでしょうか。

C 委員

先程郡部の学校は2学級でも成り立つのではないかというお話がありましたが、1学年あたり2学級の学校に来ると、私サイドの見方で言いますと教育活動が非常にしづらいです。教員の配置が難しく、先生の出張や病休等があるとやり繰りも難しいのです。また、本当の友達とでも言いますか、どうしても生徒同士の切磋琢磨ができなくなるという面があります。生徒数が少ないと言う事は部活動も少なくなるし、お金もないのです。生徒の活動は県から来ている予算もあるのですが、保護者に私費をお願いして活動している所が多いので、金銭的な面でいつもお金がなくなったらどうしようという発想になってしまいます。ですから、2学級というのはかなり厳しいです。たまたま専門高校なので教員配置も多いですからまだいいのですが、普通高校で1学級あたり2学級では学校運営上も結構厳しいですし、生徒にとっても厳しいと思います。これが私の体験と意見です。

G 委員

ある種の現実を踏まえると合理主義的な方向に走ってしまい、市部はそのままで良いから郡部をなんとかしろという事になる訳です。そうすると、教育現場の格差を固定するという批判があります。そこでA委員がおっしゃったように、市部は残して郡部で減らそうという事にするのか、ある意味で大胆に市部の中でも一回見直すをする事を踏まえて行くのか。その辺をはっきりしておかないと、視点が郡部ばかりに向いて郡部は減らして、市部はそれなりに流れてしまうのはどうかなという気がします。

C 委員

私も同じ発想で、市部もバランスを取りながら改めて見直しをして、郡部も見直す方が良いと思います。

前田副委員長

高校への進学率そのものが高くなっています。何かの都合で行けない子がいるだけで、義務教育と同じように行きます。例えば、中学校でもっと勉強しないと高校へ行って迷惑かけるかなという子も高校へ行く時代になっています。そういう子ども達が、市部の高校へ進学しても授業について行けなくて、途中で辞めてしまう事もあります。そういう意味では、自分は進学校ではないけれども高校を卒業したい、させたいという子どもと親の希望がかなえられる学校がどこかにないとだめだと思います。例えば分校などを全て閉じてしまうのは問題があるのではないのでしょうか。地域の中で特色を持たせるよう何かの形で工夫して、そういう学校も残した方が良いような気がします。

子ども達が増えるに従って学校の数も増やして来ましたので、生徒数が少なくなった時点でやはり全体の学校数は減らして行かなくてはいけないという事はあります。しかし、一律に分校を減ずるとするのは、やはり御配慮願いたいです。

B 委員

教育の機会均等とは、物理的な物も一理ありますが、学校の教育課程や教育水準、教育環境、特別活動等の色々な物を含んで考えるべきだと思っています。先程お聞きしましたが、中高の連携が難しいという事になれば、分校では2～3学級規模の学校で展開しているのと同程度の教育展開が不可能だという見通しであれば、どこかで決断しなくてはいけない部分があるのではないのでしょうか。その時に、統合という言葉は色々な組み合わせがあります。私はC委員の所と名久井農業高校が一緒でもいいのかなという感じを持っています。色々な組み合わせの中で、実質的な教育内容の保障の方が子ども達にとって第一ではないかという気がします。まだ、学級数までは研究していませんが。

C 委員

要望があるから高校を残して、生徒を受け入れて、果たしてそれで教育が成り立つのでしょうか。高校教育のレベルを、いかに保つか考えなくてはなりません。

例えば三八地区ですが、私の見解では三戸、田子、南郷、名久井農業、南部工業については、交通の面を考えるとある程度ここは合併してもいいのではないのでしょうか。その地域からそっくり学校をなくするのではなく、旨くやる方法があるのではないのでしょうか。実は、うちの学校は八戸市から半分の生徒が来ています。2つの隣の学校も、4割くらいの生徒は八戸市から来ています。その代わりに、うちからも八戸市の高校へ生徒が出て行くのです。進学やスポーツのために生徒と親が目指したい学校へ行っているものですから、そういう現実があります。なくするばかりが前提ではなく、残すという方法も前向きな意味があるという前提で話をしたいです。

前田副委員長

この前の検討会議で、小さな高校がそのまま特色を出すのはなかなか大変なので、地域の近隣にある学校が合体した形で特色ある学校を造るというような提言がありましたので、そういう形でも良いのではないかと思います。そういう中では、普通高校と職業高校もミックスできるという事を少し探っていく方法もあります。

豊川委員長

昔の青森の高校進学率は30数%程度でしたが、今は高校へほぼ全員行くようになっていきます。選抜していないから仕方がないのですが、できようができまいが卒業させてあげようという現実があります。そうであれば、同時にそういう人達を取り込んで社会人として育てて行き、多少は数学ができなくても社会人としてちゃんとやって行ける人を育ててればいいんだというふうにならざるを得ないでしょう。

今までの所では、なんとなくですが進学校は6～7学級くらい、地方で生徒が減っている高校は4学級で、やむを得ない時は2～3学級という場合もあるという感じでしょうか。

次に、普通高校、職業学科、総合学科の目指す役割との事ですが、第1専門委員会では割合が主な課題になると思います。先程申しましたように、全国とは差があるのですが、全国並に普通高校を増やして行けばいいというのが大部分の意見でしょうか。増やし方もありますが。

C委員

県としては、攻めの農林水産業という施策もありますし、農業高校への進学もある程度確保しなくてはいけないのではないのでしょうか。また、以前にもお話しがありましたが、特に六ヶ所関係ですが、青森県に企業が来た場合に、大学に工学部があるか、高校にどれくらい工業高校があるかを問われたそうです。という場合を考えると、現実的にも工業関係の企業がある訳ですから、それは捨て切れない部分があります。工業にし

る商業にしる、地域にニーズはまだ残っていると思うのです。

その部分はまず発想の前提として、例えば工業学科として現在のニーズに合わない学科が存在しているのも現実ですし、似たような学科が存在しているのも事実です。その学科を再編する形で、ある程度圧縮した形で割合は減らせるのではないかと考えます。以前、いわゆる土木が現在のニーズに合わないのではという話があった時に、将来は環境系を必要とされるのではないかとという話があり、今後環境系が設置される予定と聞いております。

工業に関して言えば、3市は色々な産業を抱えていますので、そこを拠点としながら全体を見渡して配置を見直してもいいのではないのでしょうか。特に三八地区ですが、八戸工業高校があり八戸高専があり南部工業高校があります。生徒に選択肢がたくさんあるのは良いが、他の科の選択肢に比べれば割合が少し高いという観点もあります。

B 委員

これが諮問されたのは、普通科の倍率が高いからという事でしょうか。倍率からの見直しなのか、地域住民や中学生のニーズからの見直しなのか、視点をどう捉えれば良いのでしょうか。あるいは、単純に全国に数字を合わせようとしているだけなのではないか。

事務局

この部分については、単に全国に数字を合わせるという事ではなく、青森県の姿としてこれで良いのかをお聞きしたいという事です。各県に特色があるでしょうし、本県では、今まで職業学科のニーズがあった上でこういう形になっていると思います。ただ、平成21～30年度までの学校の在るべき姿を問う時に、子どもが減って行くのに比例して減らして行くべきなのか。実際に、数の上では普通高校に行きたい子どもが多いですし、総合学科も良い所と悪い所がありますので、全体的に見て将来どういった方向に行ったら良いのか考えていただきたい。今のままで良いと言うのであれば、それはそれでこの委員会のお考えですので、事務局としては、特にどういう方向に進めばという事はありません。

D 委員

十数年前に文部科学省の寺脇さんが本県に視察に来て三沢商業高校を見た時に、こんな立派な職業学科をやっている所は見た事がないと言っていました。東京都の専門高校しか見ていないので、青森県の専門高校のレベルの高さにびっくりしたようです。それだけ本県の職業教育は相当高いレベルだったと思います。

学級減が始まった時期に、カットしやすかったのは普通科だったのでしょうか。職業学科は歴史や先輩後輩もあり、カットしにくかったのではないのでしょうか。1学級の定員を40人から35人に引き下げたりはしているようですが、なかなか生徒の減少には追

いつけず成果があがっていません。

基本的に現場にいて思うのですが、中学校の先生達から聞くのは、まず生徒に職業学科の良い所を説明しても、やはり保護者・本人共にできれば普通科へ行きたいと考えるようです。ただし、現実問題として倍率や学校数の問題から私は商業高校や工業高校へ行きましたという事になってしまいます。ですから、工業高校の倍率はこうだから生徒の志望は基本的に高いのだという事にはならないと思います。そこにあるから行ったというだけです。今後もちろん職業高校の今までの教育実績は評価されるべきとは思いますが、やはり基本的には高学歴社会に入っていますので、大学あるいは専門学校へ行って専門的なものを身に付けて行くという形になるのではないのでしょうか。そうすれば、多ければ多いほど良い訳ではありませんが、普通科はある一定の割合、本県の場合は64～65%程度あって良いのではないのでしょうか。

前田副委員長

初めから工業高校、商業高校へ進みたいという進路志望は出てきません。子どもも親も、まず普通高校へ行きたいと考えます。また、学校側でも、選択肢がある中で職業高校・普通高校への十分な進路指導はしていない事もあります。従って、どちらに行くか決められないので普通高校へ行き、その後で将来の事は考えたい。D委員がおっしゃるように、普通高校に行けないので、しょうがなく職業高校に行くのであって、その後の何かを目指して普通高校へ行くという訳ではないのです。一部を除いてですが。

F委員

親として見ても、まだ中学3年生の子どもに将来のビジョンを決めろと言っても、私もできなかつただろうし、自分の子どもにそのように育てて欲しかったと言われた事もあります。だから、普通高校に行かれるのではないのでしょうか。それからでも遅くないという感じがします。

豊川委員長

普通高校を増やすという方向には異論はないですかね。やはり、青森県は普通高校が少ない感じがします。

G委員

青森県の地域政策、産業政策から見ると、三村知事もよくおっしゃいますが、大手会社を誘致する時に旨く行かない理由の1つに、技術者の不足があるようです。青森県の産業政策もありますので、あまり企業進出も順調ではない現在では県外に流出して行く事になるかもしれませんが、やはり工業高校での技術者の養成は必要ではないでしょうか。現実にはなかなか働く場所がないと言いますので、鶏と卵みたいなものですが、この問題は教育とも絡むと思うのですが。

豊川委員長

農学に関して言えば、ほとんど農業に関する就職はありません。やはり、工業はその分野への就職が多いのでしょうか。

C 委員

十和田工業は六ヶ所の関係もありまして、県内の企業の求人がかなりあります。県外へ出たいという生徒は県外に出していますので、来た求人を頭を下げてお断りする事もあります。しかし、南部工業は県内の求人が少ないのです。今年は進学者は3人しかいなく、残りの就職者の8割が県外です。地元では雇用の場がないのです。これが現状です。

以前は企業が来る場合、結構十和田工業高校へ直接来ました。どういう教育をしているか授業を見たいとか、どういう所に就職しているか、全部調べてから企業は来たいのでしょうか。そこまで調べてそれならいい、と言う企業は、高専以上の知識、大学以上の技術がなければ役に立たない、という発想に立っているようです。工業高校は必要だと思いますが、ただ、現状では出口の部分で県内ではかなり厳しくなるだろうという事です。同時に、企業誘致の面も考えると、ある程度の学科は残しておくという形が一番良いのではないのでしょうか。色々な所を調べながら、企業も行政も色々な形でレベルを維持して欲しいです。

企業としては、工業高校を卒業して工業系大学へ行った者が欲しいようです。普通高校を終わって、その辺の大学へ行った人は少し違うようです。それでもやはり大学卒が欲しいようです。

E 委員

中学生が希望するのに普通高校に行けないから、という理由で普通高校を増やしても普通高校へ輪切り状態で行って行くだけで、高校では将来的・具体的な目的がない状態で勉強し、何をやっていいかわからない子どもが増えるのではないのでしょうか。簡単に普通科を増やすのではなく、むしろ普通高校、職業高校、総合学科それぞれで大学進学を進めさせるような指導をして行かなくてはなりません。単に普通高校を増やせば良いというのには賛成できません。

C 委員

総合学科の位置付けなのですが、職業のガイダンス的機能を持っている学科という事で捉えていましたが、青森中央高校は総合学科でありながら進学を主としてある程度成功していると聞いてます。総合学科のキャリア教育の部分と普通高校的な部分を取り入れているとして捉えて良いのであれば、今の意見を取り入れて総合学科にし、総合学科にも進学できる体勢があるのでそちらの方向へ行けば良いのかなと考えていました。そうすると、総合学科の割合が極端に増える事が難点ですが、総合学科を旨く活用すれば、

進路で悩んでいるたくさんの生徒に対応できるのではないのでしょうか。

E 委員

郡部の学校をまとめて学校を造る時には、当然進学や工業系だけで1つの学校を作るのは無理です。私のイメージは三八地区ですが、まとめた学校は総合学科という形で、就職と進学の両方に対応するのが理想的ではないかという感じを持っています。

A 委員

埼玉県等の総合学科では、大学なみの建物と施設・設備を持ち、人員もきちんと配置されて、しっかり整えられた講座制の下で教育を受けるという形です。本県の総合学科では、豊富にコースは用意されていますが、付随する施設・設備はどうかと言うと厳しい面があります。お金をかけなくても、既存の施設・設備を有効に活用する事で旨く行く事もあるのですが、現状は先生方の努力により「総合的な学習」のような手法で何とか動いているのではないかという懸念があります。やはり、それなりの物と人が必要なのではないのでしょうか。県財政が厳しい現状ですので、これからは金のかけ方にも工夫がいると思いますので、職業高校の統合・転用など既存の施設を利用して行く総合学科も考えられると思います。

G 委員

基本的によく分からないのですが、解釈の仕方でどういう理屈もつけられるが、現実にはどうか良く分かりません。

豊川委員長

私は大学しか知らないのですが、実際に、大学入った時点で自分の将来の道は何も決まっていなくて多い人がいます。高校と同じように、入れる大学に入ったのでしょうか。自分で決める段階や方向も決まっていません。それはやはり社会の影響だと思えます。親も何も言わない。先生方も何も言わない。結局、切羽詰まって大学に入ってからようやく決める。だから辞める人も結構います。教育の過程で何かが抜けているという気もするのです。そこに来て初めて考えるので、高校もそうだと思いますが、フォローできないケースがあるのかもしれない。先生が少なく忙しくて、話しも忙しくてできないという問題もあるようです。

そういう状況の中で、どうすれば先生達を旨くリードできるか。そのために、高校の体勢をどうするか。現実には、総合学科という高校に1つの方向性があるのではないかという感じがします。

G 委員

七戸から始まった総合学科について、教育委員会の方でどのような検証して、どのよ

うな評価しているのかを伺ってみたいです。

豊川委員長

前の諮問では少し出ていたかもしれませんが、具体的には出ていません。むしろ、この第1専門委員会ですらこうしてくれというふうには話せば良いと思います。やるかやらないは事務局で考えてもらって。ですから、可能性も視野に入れて、お金の問題もあまり気にしないで提案してもいいのではないのでしょうか。

事務局

総合学科が6校あるのですが、資料7の最後のページにあるように、各系列というものがあって各校でこういう方向へ総合学科を持って行く事を目標に、各校共に違う要素を持って動いています。はっきり申しますと、全ての総合学科が旨く動いているかと言いますと、非常に厳しい学校もあります。A委員からも出ましたが、総合学科と言うと、生徒達の選択肢が広いというキャッチフレーズで走っていますが、選択幅を広げるには人と物がなければだめです。人と物全てを揃え、幅広い選択に対応するのは大変な事です。各学校では何系列か設定しているのですが、木造高校、青森中央高校、大湊高校にしても、ある程度進学を意識した総合学科という形ではないかと思えます。他の系列を見ても、それほど無制限に選択できる教科・科目を置けるかと言うと、なかなかできない状況です。総合学科については、学校の状況によって差が出ているというのが現実ですし、全国の大会では総合学科は結構厳しいという意見も出ているようです。

豊川委員長

総合学科のどこを改正すれば良いのですか。

事務局

総合学科という形で農業高校と工業高校と商業高校を一緒にすれば良いという場合でも、商業はそれほど設備はいらないが、農業や工業になると色々な設備が必要になります。ですから、郡部なので工業と商業を一緒にした学校が欲しいと言う場合でも、それなりの設備がないと工業や商業を目指す子ども達の教育趣旨は保って行けないという危険性もあるのではないのでしょうか。

豊川委員長

設備すれば良いのではないのでしょうか。

事務局

設備できれば、郡部でもどこでも良い学校が作れるのですが。

D 委員

間違った考え方かもしれませんが、昔は普通高校と職業高校の2つしかなかった訳です。中学校卒業の時点で進路を明確にできないという事で、そこに中間的に総合学科を作ったのでしょう。先程申しましたように、寺脇さんあたりが、東京都内の専門高校が非常に荒れている状況で進路が明確にならないならば総合学科的なものを持って来た方が良いのでは、という事で考えたのではないのでしょうか。ただ、あくまでも中間ですから、工業高校の学科のような設備は設置できませんし、あくまで望ましい職業観を与えるという役割の学校です。設備してしまえば職業高校と同じになってしまいますし、単位数も違う訳ですので、そういう意味で色々な系列を持ってできるだけ子どもを活かした職につけるようにする学科という事だと思います。

最近の子どもは、進学する目的意識が明確でなくなっています。他県での普通高校では大学進学率が60～70%ですが、本県では普通高校でも大学だけではなく、就職や専門学校というようにバラエティに富んでいます。他県では普通高校と言うとまず進学という意識です。おそらく、本県では歴史的に普通高校の方が設置にお金もかからないので、そこで何でもやるという形なのかもしれませんが、これからは各学校の役割、設置目標を明確にしていかなければいけないと思います。

事務局

郡部の高校を統合して新たに総合学科を設置するという事に関して、現にある学級数を単純にプラスするという意味では総合学科設置は十分ありえるでしょうが、将来に渡って今の学級数を維持できるかと考えると、例えば郡部の学校で、2学級と2学級と3学級を足して7学級の学校を造りますと言っても、将来ずっと7学級で行けるかと言うと、この第1専門委員会で考えていただくのがその点にあります。平成21年に作るのはいとしても、その先を見通して十分お考えいただければと思います。

C 委員

総合学科と普通学科は基本的に全く別物だという事で、そこは誤解なさないようお願いします。

職業学科同士の統合についてお金の面の話しが出ましたが、それだけでなく、学校の意識、子ども達の意識が違ってきますし、それぞれに歴史がありますので、そういう理由でかなり統合が押さえられている部分が多いのではないのでしょうか。

企業の方からの話しでしかないのですが、青森県の工業高校はどこでも安心して素晴らしいという事ですが、工業高校の教科書が東京を基準に作られていますので簡単過ぎる、それくらい青森県の工業高校はかなりのレベルの教育をしていますので、単に統合するというのには反対です。東京でそういう総合高校を3～4つ作ったのですが、やはりぼんやりとしたものになってしまったようです。学校の目的から生徒の意識から変わってしまい、全く違う学校になってしまったと学校視察の際に聞きました。東京都では、そ

ういう自己評価をしているという事を考えていただければと思います。

豊川委員長

そんなに違うものですかね。

B 委員

私は、全国平均にしようとする、青森県の10%と言えば1000人ほどです。と言う事は、生徒数の減少とこれが相殺されると先程問題となった2～3学級の学校がそのまま残る事になるのです。今でも普通高校の希望が多いのですから、私個人としては総合学科は余り増やさなくてもいいのではという意識を持っています。

私は今弘前高校にありますが、進路に関する意識を変えようと試みている所です。入学当初の目標は何%達成されたのかという率で物事を見て行く時に、総合学科は目的を持っていないと思っていますが、その達成率の比較では総合学科よりも普通高校の高い目的達成率が生徒にとって魅力のある学校になる訳です。総合学科は、まだ不確定要素が多いので意識して増やす必要はないでしょう。職業学科はそんなに学級数も減らせないという事になれば、結局郡部の学校に持って行くしかありません。その辺を旨い方法を見つけない事にはももやり直しになります。個人的には、総合学科は余り増やさなくてもいいのではという意識があります。

豊川委員長

専門学科は以前は下宿していた生徒が多かったが、今はそうではないようですね。

総合学科が話題になっているのは、普通高校と一緒に進学コースのようなものを設置するからではないかという気がしてきました。

B 委員

全国平均と違うと言っても、総合学科は1%しか変わらないですよ。

豊川委員長

むしろ専門高校と普通高校の差でしょうかね。

C 委員

職業高校の時代にマッチしない学科等を統合して行けば、単純な圧縮でかなりスムーズに行くと思うのですが。

豊川委員長

進学については、ほぼ全員が高校に入りますからあまり問題にならないと思います。生徒達にとって総合高校がいいのか、職業高校がいいのか、そこが分からないのです。

前田副委員長

親と生徒の希望を聞いて行くと、農業高校の希望はほとんどなくて、農業をやっている親が自分の子どもを農業にやろうとするくらいです。県が薦める攻めの農林水産業と言っても、そこをどういう形で次の世代へバトンタッチするかが問題で、このままでは遮断されてしまう恐れがあり怖い事です。

C 委員

工業高校も、来た生徒をあるレベルまで鍛えて出すというのが我々の基本的スタンスですので、存在する限りそんなにレベルは下がらないと思います。

D 委員

やはり、普通科を増やすのではなくて、職業学科の見直しするべきではないでしょうか。例えば、電子科があって電子機械科があって、中身は違うのかもしれないが、似たような事をしてるように見える所も結構あります。また、工業系は10年もすると相当変化しますので、絶えず内容の見直しをかける必要があります。5学級であれば括り募集で4学級にする等、選抜のやり方を含めて、学科の統廃合を進めて行くのが良いのかなと思います。それが進行する事で普通科の割合が上がるように、この場で7割がいいか決めるという話ではなくて、割合については自然に決まるものではないでしょうか。本県の職業高校は、先生達の努力によって高度なレベルを保っておりますので、あえて全部壊す必要はないと感じます。少子化という時代の中で、自然に統廃合を進めて行けば、本県ならではの割合が自然と出てくるのではないのでしょうか。

C 委員

自然に行くと思います。例えば、中身に入っていくと、機械と電子機械は同じ科ですから。

豊川委員長

例えば、そういう科は廃止する方向だったからという事ですか。

D 委員

1学級40人募集であれば、1つ学科を少なくすれば40人減る訳ですから。

豊川委員長

そういう感覚であれば良いのですが。それは非常に理想的な方法ですが、普通であれば絶対に減らさないでしょう。実際に学校行政として減らせますか。

事務局

割合を厳密に示すのではなく、先程の議論の中にありましたように学科の整理をする事で自然と普通科の割合を幾分上げて行く事が必要ではないか、という整理ができれば第2専門委員会に話を持って行けますが、お互いにこちらが決める話しではないとしていると話がまとまらないので、第1専門委員会の皆様がどういうふうに考えているかについて、個別具体的に何%だという話にするのはかなり難しいと思いますが、何かしら方向性を出していただければ、それを基に議論が進むのではと思っております。

豊川委員長

どうしても答申は抽象的になりがちですが、やはり何か踏み込んだ事をしなければ、結局何もできていないのと同じだと思います。前の答申もそうです。やるなら思い切ってここまでやったらいいのではというくらい、青森県はここまでやれるんだという皆さんの意見を出して欲しいのだと思います。もちろん気持ちは分かりますが、アバウトで構いませんのでこちら辺が妥当なのではという意見を出して行きたいです。なるべく軋轢はないようにまとめたいとは思いますが。

D委員

普通科、職業学科、総合学科の比率はどうあるべきかという事には、これが理想的だというものはない訳です。東京都は東京都の歴史がありますし、全国はこうですよという数字はありますが、本県では今までこの割合が受け入れやすい理由があるのだと思います。むしろはっきりさせたほうが良いと思うのは、前のテーマの1学年あたりの適正な学級数の結論で、減らし方の手順も明確に出した方が良いのではないのでしょうか。抽象的でいざという時に反対に合わないように、減らし方の基準を明確にし、例えば何年間こういう状態が続けばこうするとはっきりさせた方が良いでしょう。

F委員

やはり、学級数を減らした方がよいと思います。今まで、ベビーブームでどんどん学校が増え青森もいっぱい高校ができましたが、1学年6学級から5学級にするのではなく、昔必要で新しくできた所をまた元に戻り洗い直して、もう一回戻ってみるのです。学級数を減らすのではなく、学校を統合するべきです。

G委員

少子化により2,700人も生徒数が減る時に、我々が受け身の格好ではつらい話しになってしまいます。前向きな気持ちになれるような切り口があれば良いのですが。マイナスの方向に囚われてしまって良いのかという気持ちが皆さんあるのではないのでしょうか。

豊川委員長

郡部と市部がありますけど、人口動態を見ると郡部は凄く減っています。これは現実ですよね。一方で、市部と郡部の学生の逆流があり、これが分からない所です。

G委員

市町村合併がどうなっているかも検討しないといけないでしょう。ある意味では、自治体の枠がシンプルになって市部と郡部という概念が薄れているかもしれません。また、交通政策をどうするかという議論も当然おきてくるでしょう。

D委員

現在の望ましい学級数4～8学級については、妥当かなとは思いますが、やはり津軽半島、下北半島、山間部を抱えて逃げ場がない訳です。移動できない距離の場合はどうするのかという問題もありますので、本県ならではの望ましい学級数は、市部とそれ以外で分けて考えても良いのではないのでしょうか。

豊川委員長

次への思考の資料としていただければいいと思います。今日はこれでよろしいでしょうか。

事務局

については、第2専門委員会と密接に関わってくるものです。明後日に第2専門委員会の方で、各学科等系列の検証をより具体的にすることになっていきますので、その内容を御覧いただければ、また今日の話の方向性が見えてくるのかなと思っています。第2専門委員会とは密接に関係しておりますので、記録的には間に合わないかもしれませんが、双方に連絡を取りながらやっていきたいと思っています。

今回は10月の開催ということで期間がありますので、第2専門委員会の内容は事前に御報告できると考えています。

次回のテーマについて、事前に御意見をいただいておりますが、改めてこちらの方から早めに御連絡させていただきます。開催日時につきましても、委員長と副委員長の日程を伺いまして、改めて決めさせていただきたいと思っています。

司会

以上をもちまして、高等学校グランドデザイン会議第1専門委員会を閉じさせていただきます。本日はありがとうございました。